

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（令和2（2020）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 京都大学工学研究科（教授・陰山 洋）

研究交流課題名 エネルギー変換を目指した複合アニオン国際研究拠点

評価結果（総合的評価）

- S 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
- A 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
- B ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
- C 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。

所見

本課題における拠点形成は、コロナ禍中にあっても、人の移動を伴わないオンラインツールの活用により概ね順調に推移している。共同研究については、各国のコアメンバーの独自の研究技術を組み合わせ、拠点内の国内外の研究者による共同執筆論文が米国化学会誌等の当該分野において国際的な評価が高い論文誌に9報掲載されるなど、十分な数の質の高い成果を出している。

若手研究者育成については、本課題が掲げる3つの育成指針（新しい専門知識・技術の獲得、自由な発想での研究の立案・実施、独自の研究ネットワークの形成）のもと、若手研究者が着実に育成されている。国際オンラインセミナーで若手研究者の発表を促す、若手研究者を日本国内でのミニ留学で相互派遣するなど、活動が難しい状況の中で若手研究者が主体的に活動・連携できるよう取り組みが工夫されている。拠点メンバーに合成化学者と理論化学者を配置したことで、拠点内での交流が研究者のスキルアップにつながるように設計されていることも重要な波及効果である。次世代を担う若手研究者に求められる理論・実験両技術の修得や合成・解析・機能が一体化した研究体制の中での人材育成は、その継続によって将来的に大きな波及効果が期待できる。

多角的な研究手法を積極的に取り入れ、人材的にはシニアから中堅、若手まで幅広い研究者層を含む国際的ネットワークを構築しており、人材交流が今後活発化することで多国間連携が進捗し、複合アニオン研究の世界的水準の国際研究交流拠点の形成につながると期待できる。